

タイ国仏教研修の旅

岡島秀隆

はじめに

タイ国はアジア大陸の東南部に位置し、東北部及び東部はラオス・カンボジア両国と、西部はビルマと、また南部マレー半島部ではマレーシアと国境を接しており、昨今の外交軍事情勢のもとで何かと緊張を孕んだ地域にある。今回の旅行においても、北部のチエンマイ圏を訪れた際に、通訳のソンバット氏が国境紛争や懲兵制のことなど熱心に説明をこころみていたのが印象に残っている。タイ国

土の面積は、五一万四〇〇〇平方キロで日本の約一・三五倍あり、南北に長く、おおまかにいえば北部の山岳地帯と中部の大沖積平野、そして南部の湾岸・半島部より成っている。気候は全土が熱帯に属し、平均気温はチエンマイで摂氏二六・三度、バンコクで二八・五度を記録する常夏の国である。季節は雨期（五月—一〇月）と乾期（一一月—四月）の二シーズンに分かれるため、我々研修団の訪れた七月は雨期の最中ということになる。人口は内務省発表（一九八一年）によると四七八八万人で、バンコク首都圏で五三三万人、チエンマイ県で一一八万人を数える。主要種族はタイ族（シャム、ラオ族）で全人口の八五ペーントを占めているが、メオ族等の北部山岳民族は約二〇種族あり、更に四〇〇万と言われる華僑の大半はタイに同化している。まさにタイ国は典型的多民族国家であるといえよう。

このようにみてくると、一体この多民族（多言語、多文化）国家の統合理念は何かと考えてしまふ。一言にしていえば、それは仏教と国王への尊敬と忠誠の心である。我々訪泰団は旅行中、タイ国旗の象徴性について一度ならず耳にした。それは、この三色旗の中央の青色が国王（王制）を、その上下の白が仏教の崇高を、そして外側の赤色が両者の尊厳を守るために流された民族の血（団結）を示すというものであった。タイ国々民の最もほこりとする仏教と王制について、その歴史と実状を探訪することが、今回の旅行の眼目となつたことは理の当然ということができよう。

タイ国仏教研修の旅（岡島）

七月二十三日（火）名古屋——大阪

我々の大勢はチャーターしたバスで午後二時過ぎ名古屋を発ち、大阪空港前のホテルに向った。夕方五時頃宿泊地に着き、ときどき降る雨に気をもみながら、出発前夜を過ごした。

七月二十四日（水）大阪——バンコク——チェンマイ

七時三〇分頃朝食をとった一行は早速空港へ向い、空港二階ビルームで結団式に臨んだ。当日直接に当地入りされた団員諸氏も含め、各自の自己紹介と、竹田鉄仙団長の挨拶がなされた。

10：00 出国手続を無事すませた一行は、日航七〇一便で日本を後にした。経由地香港で二組に分かれて別便に乗りこむこととなつた。諸事情から止むなくとられた惜置であつた。筆者は後発組の他五名とともにキャセイ七五一便に搭乗した。外は晴天、咽せかえるような盛夏の熱気が機窓を通して伝わってくる。タイと日本の時差は二時間あるといふ。腕時計を修正して離陸をまつた。

16：55 パンコク着。空港レストランで先発組に合流する。遅れること四〇分あまりであった。一同はここで軽食をとり、チェンマイへの国内便出発を二時間ほど待つ。ゆるやかな時の流れの中で、自分の体が異国の大気に同化していくのがわかつた。

19：00 タイ国内線で最初の宿泊地チェンマイへと向う。
20：00 チェンマイ空港到着。バスでオーキッド・チェンマイホ

テルへ向う。あたりはさすがに夕闇につつまれていた。ホテル着後、部屋割を行ない、各自が旅の疲れを癒す。最新のホテルの室内は、広く快適であった。

七月二十五日（木）チェンマイ

07：30 起床。曇天であったが、部屋から見おろすホテル前の道路では、すでに通勤のバイクの連なりに切れ間がない。五〇cc余りの小さなバイクに勇敢な二人乗りの男女などがいて、なかなかの賑わいである。チェンマイ地方には、アーナンとチュンタという二人の若者にまつわる昔話がある。仏様の話をして聞かせるという約束を守らないアーナンに腹を立てた神々が、アーナンを殺す相談をしているのを耳にした使用人のチュンタが、日の出前に主人を起して命を救つたという件がそこにあるが、現在も早起きは北部タイの人々の慣習となつており、陽の光が頭にさし込むまで朝ねぼうする者は、命が短くなると信じられているという。こんな話を思い出しながら、この微笑の国の人々の素朴で勤勉な側面をかいま見る思いであった。

09：00 朝食後、バスでドイ・ステープ寺院、メオ族集落の見学に出発した。チェンマイ大学前を通り、人々の尊崇を集めクルバシウイチャイの銅像を右手にみながらドイ・ステープ山に向う。この山は標高一六七七メートルで、植生は熱帯樹林である。家具材などとして日本でも馴染みのチークやらがそここに茂るつづら折れ

の山道を行く。標高一一〇〇メートルあたりにワット・ドイ・ステープがある。その門前でピックアップトラックに分乗して、細い赤土の道をなおも奥地へと二〇分程進むのである。きらびやかに塗装された車は、粗悪ガソリンのせいか、空気の希薄なせいか、時折けたたましい破裂音を発しながらジェットコースターのような起伏のある悪路を走った。

10:00 メオ族のキャンプに到着。ここには六〇〇人ほどの山岳民が住んでいるが、観光地化の進んでいためか、売り込みの激しさには閉口させられた。メオ族は独立心が強く、自給自足の農業生活を営み、移住をくり返し、中国文化の影響を多く受けながら独自の救世主信仰や生活習慣（一夫多妻制など）を維持していると聞いていた。しかし、眼前の彼らの家の軒先には、トヨタ、三菱等のトラックがおさまっている。また彼らにとって銀の装身具は特別の意味を持つようだが、それといい、繊細な刺しゅうといい、今はその大半が商品化されている。一軒の住居に案内されると薄暗い屋内の寝台に一人の男がアヘンを吸っていた。このデモンストレーションを尻目に炊事場とおぼしき所をみると、鳥の羽をあしらった祭壇ようのものがわいた。恐らくメオ族（フモン族）特有のかまどの神ではないかと思われたがよくわからない。その後唯一つの学校に行つた。年少、年長のクラスがあり、ここばかりは何処も変わらぬ子供達の無垢でいたずらっぽい瞳が我々を迎えてくれた。

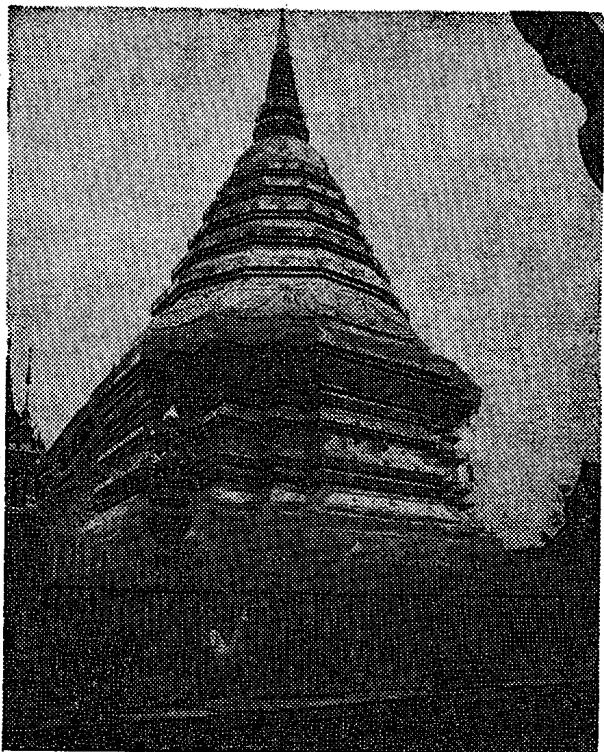
11:00 メオ・キャンプを後にしてワット・ドイ・ステープへ。

タイ国仏教研修の旅（岡島）

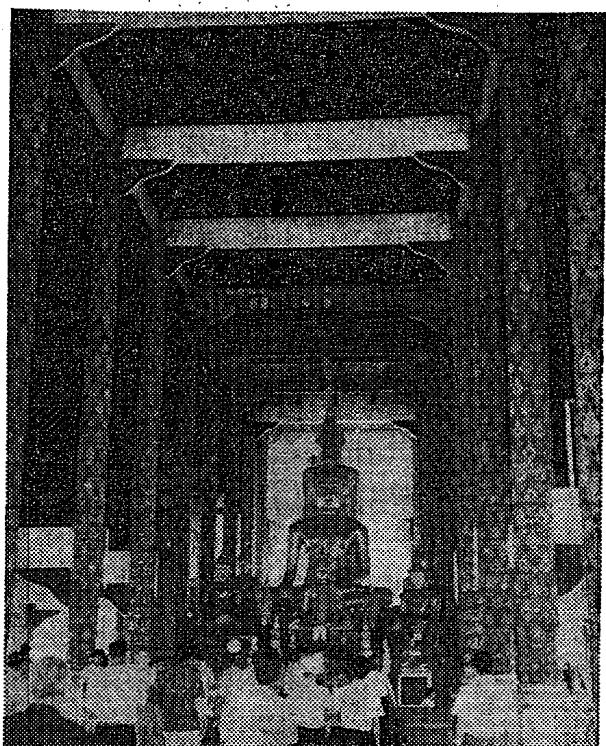


メオ族の子供達

11:10 ワット・ドイ・ステープ前の広場で今回最悪の旅を終える。登山列車で寺院境内へと登る。本堂周囲の展望は実際に見事で、チエンマイ市の美しい景観がはるかに広がっていた。マニ車よろしく銅製の小鐘が回廊に並び、参拝者はそれを次々と打ち鳴らしてご利益を願うのだという。金箔に埋もれたチエディ（仏塔）が寺院中央に聳え、仏陀の遺骨が納められている。堂内は下履禁止であり、ローソクの灯と線香の煙と献花をする善男善女でこつたがえしていた。一同もまたチエディ正面で経



黄金のチディ(ワット・ドイ・ステープ)



ワット・スウォンドーク本堂内部

13・50 ワット
・スウォンドーク
着。スウォンドー
クは花園の意であ
るらしいが、それ
らしきものは見
えない。ここもま
た一三八三年にグ
エナー王によって
建てられており、
スコータイから贈
られた仏舎利の残
り半分があるとい

う。更に代々の王属の菩提寺であり、今も王属の遺体はここで火葬
されるのだそうだ。本堂は、チークの一本木で作られた多数の丸柱
に支えられた切妻三層の木造建築である。正面切妻三角壁の細やかな
彫刻には感銘を受けた。全国一、二と言われる堂内の青銅仏は、
メングラーイ王朝一三代王のものといわれている。

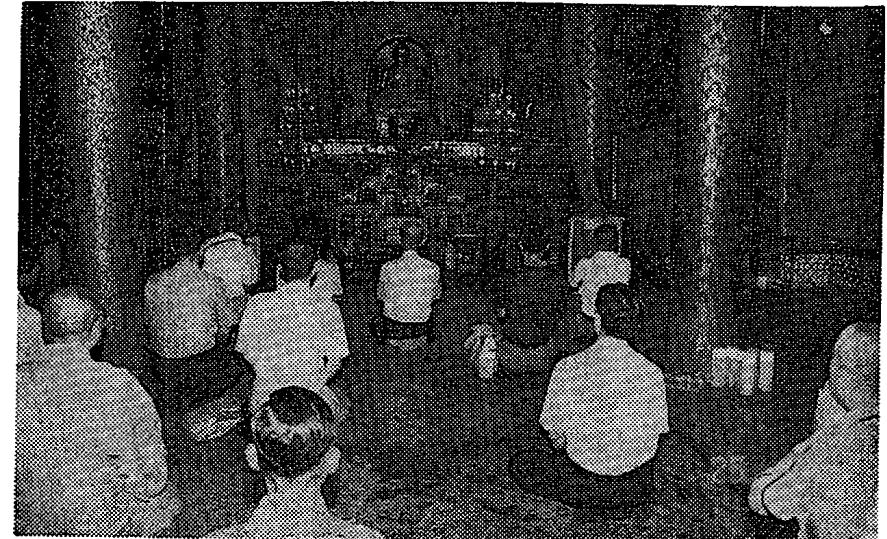
12・30 山を降りる車中、メオ族の最も重要な年中行事が二月の
新年祝いであること、その折にはアカ犬ならぬクロ犬の肉が供えら
れること等、通訳の説明を受けた。

12・55 「白い象」にてタイ式の昼食をとる。出発。

14・23 ワット・プラシン訪問。この寺は、一三四五年にプラチ
ヤオペユ王が父王の墓所として建立したといわれる。聖殿はタイ建
築の白眉といわれ、壁画も北部タイの伝統的なものである。タイ正
月（ソンクラーン）に行なわれる水かけ祭は大変有名である。伽藍



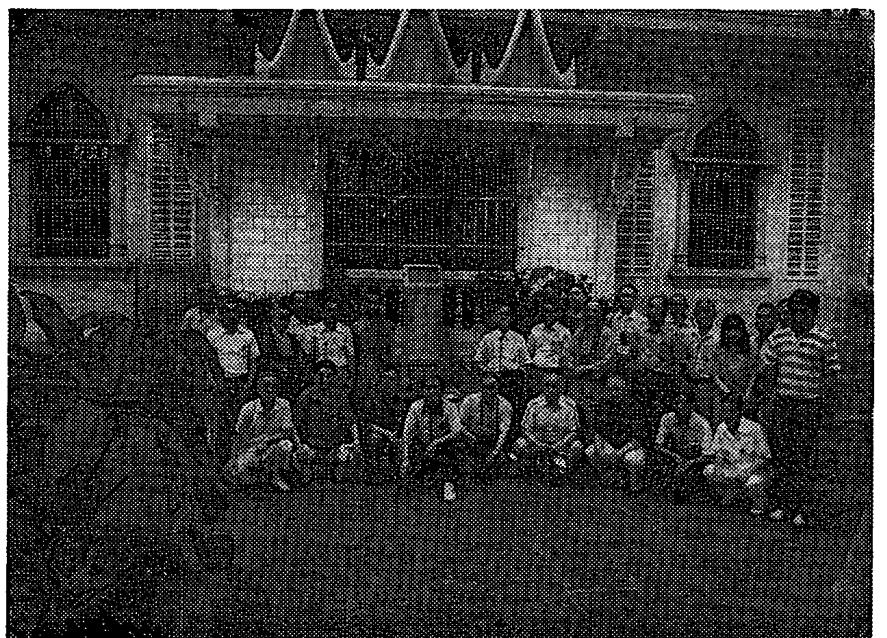
聖殿プラシン像前 (ワット・プラシン)



拝観中、参詣人に黙々と祈禱をほどこしているタイ僧におめかにかかった。柔軟なすがすがしい眼差しを持つ老僧である。我々に何か渡したいという。言葉のままにいたぐと、それは豆粒大の仏陀の石刻であった。以前タイなどには高僧然としていない真の高僧がいらっしゃると聞いたのを思い出す。広い境内には学校と修行僧の居住区もある。

14 .. 55 ムンサン寺院到着。ここは旧日本軍の野戦病院のあったところで、戦没者の慰靈碑があり、今も訪れる日本人は多い。碑前で一巻の経をあげる。境内は静かでごらんまりとした佇まいを見せていた。

タイ国仏教研修の旅（岡島）

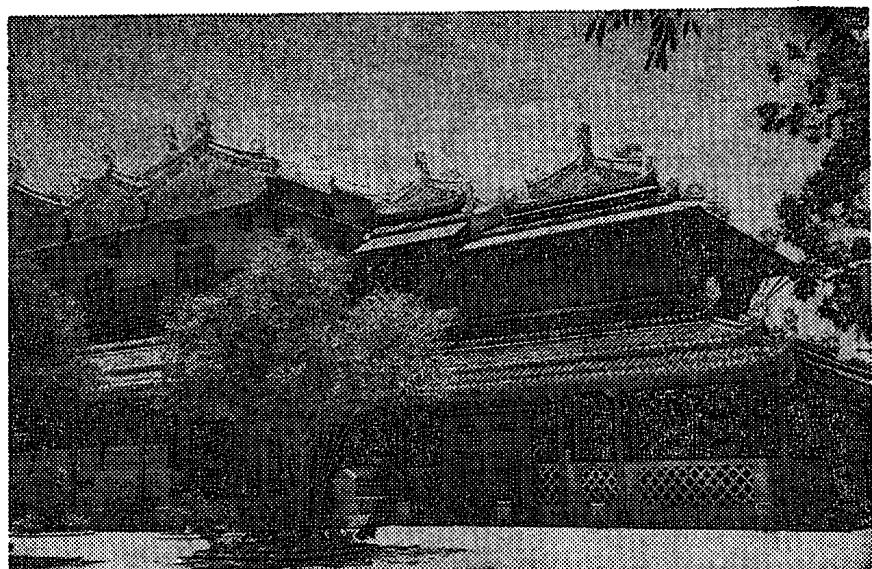


戦没者慰靈碑前で (ムンサン寺院)

| | |
|----------------|---------------|
| 15 .. 15 .. | 15 .. 15 .. |
| .. 50 .. 20 .. | 細工工場見 |
| 16 .. 16 .. | 学。 |
| .. 45 .. 10 .. | ーク工場見 |
| 17 .. 15 | チ |
| 19 .. 00 | ホテルに戻り、休息をとる。 |
| 市内レストランで晩餐。 | ランで晩 |
| 自由解散。 | 自由解散。 |

09 08 07
.. ..
00 00 00

七月二十六日（金） チェンマイ——アユタヤ・バンコク
起床。朝食。
オーキッド・チェンマイホテルを出発し空港へ向う。
国内便でバンコクへ。



プラ・ティナン・ヴェハ・チャムルン（バンパイン）



廃墟の情景（ワット・マハータート）

- 10・20 バンコク空港ロビーで一日のスケジュール説明をうけ、
一路アユタヤへ向う。長閑な田園風景の中を走ること一時間、バン
パイン離宮に到着した。
- 11・20 バスを降り水際にそって豊かな木立ちの縁の下の長い舗

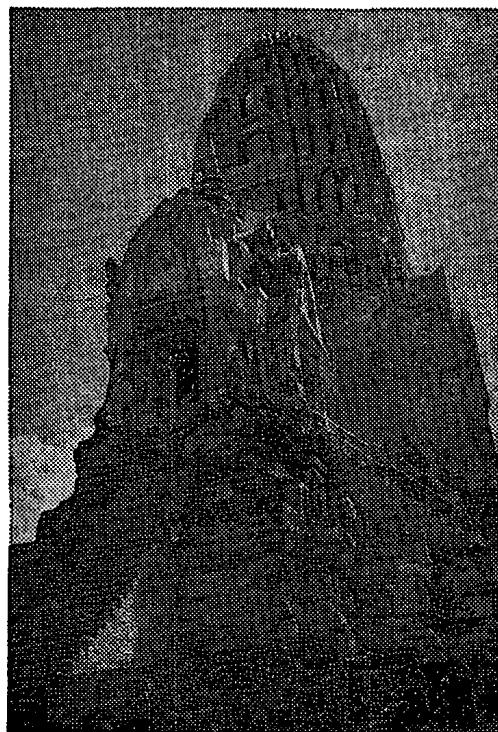
の景観は王の治世に完成されたという。五つほどの建造物中、俗に水上パレスと呼ばれるプラ・ティナン・アイサワン・ティッパアスと中国風のプラ・ティナン・ヴェハ・チャムルンが印象深い。

- 12・20 バンパインを発ち、アジアハイウェイを走る。タイは日

装路をゆく。バンコク入りしてからは、昨日の曇りがちな天候とはうつてかわった青空のもと、木々は一層彩かな影を地上に落としている。ここは、プラサート・トオノ王（在位一六三〇—五五）が、一七世紀中葉に建てた夏の離宮である。王の治世に建立されたものとしては他に、チャオプラヤ河（メナム河）の中洲にワット・チュムポンニカヤラムがある。その後こそはアユタヤ朝歴代王の離宮とされ、一時疲弊したものの、ラマ四世モンクット王（在位一八五一—六八）以降再び王家の離宮として利用されるようになつた。名君の誉れ高いラマ五世チュラロンコン王はここをこよなく愛し、現在

本と同じ左側通行になつてゐる。途中レストランで昼食をとつた。

14・00 アユタヤ遺跡着。初めにワット・マハータートを見学する。これは、スコータイ遺跡にある王室大寺院と同名のものであるが、スコータイ王朝のラーマ・カムヘン王碑文にいうアターラサ仏を指すと思われる巨大な仏立像のあるそれとは別のものである。更に、ロブブリ、チャリエン等にも同名の寺があつて紛らわしい。眼前にあるこの寺院は、一三世紀の重要な寺院のひとつだつたらしいが、ビルマ侵入に伴いほとんど破壊し尽くされている。クメール様式の寺院と説明を聞いたが、伽藍全体からすれば、クメール、スリランカ、ビルマなどの建築様式に土着のタイ様式を融合して、はあるかに自由な空間構成を有するとも言われる。(別名ウートン様式)

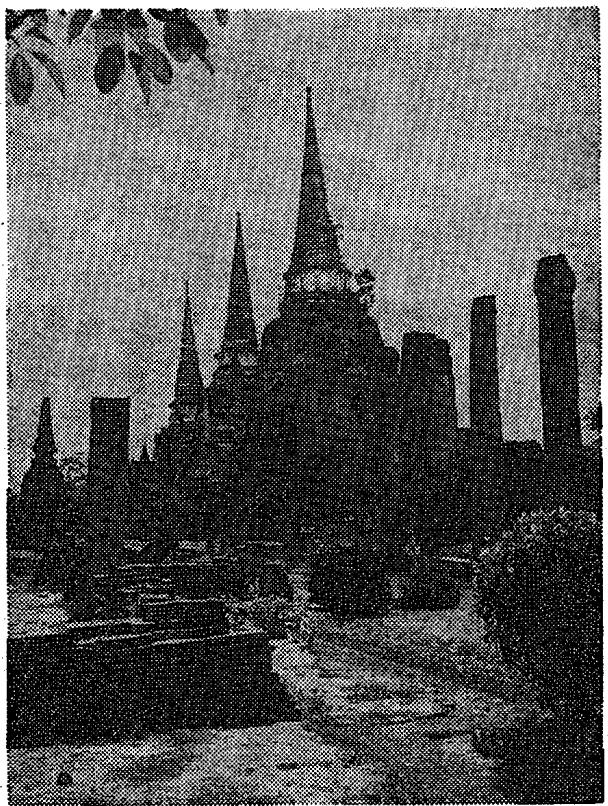


プラ・プラーン
(ワット・ラシャプラナ)

多くの寺院を直接にたずねたわけではないが、アユタヤ遺跡中に於いては特徴ある寺院のひとつといえよう。門を入つてすぐに大きな木立ちがあつて、その幹の根もとあたりに仏陀像の首だけが顔を覗かせている。これは、地中深くに埋もれていたのが木の成長につれて引き上げられたのだという。その前に供えられた花札を見ながら先に進むと、打ち壊されたラテライト(紅土)の仏像群が随處にみられる。時の流れのざわめきが我々に語りかけてくるようである。この寺院は一三七四年、アユタヤ朝三代のパラマラージャ一世の創建とされる。

14・20 ワット・ラシャプラナ見学。ワット・マハータートと対をなしたと考えられるウートン様式の寺院である。寺といつても今はすでに廃墟と化している。一四二四年に即位したパラマラージャ二世が、二人の兄の為に建立したと伝えられる。一画にある塔堂の入口をはいり、地下への階段を降りると、スリランカ風の仏画と中國風の武人と子供をモチーフにした壁画が興味をひく。漆喰の化粧がおちてむき出しレンガの骨格を顯わにしたこの塔堂は、先のマハータート寺院にも見られたプラ・プラーンと呼ばれる砲弾型の建築様式をしており、それが青空を背景に地面からせり出した姿はいかにも印象的であった。

14・40 ワット・プラ・スリ・サンペット見学。アユタヤで最も良好な状態で残つてゐる遺構である。様式上はスコータイの影響が頗著となつて、そこで好まれたスリランカ式のプラ・チエディと呼



プラ・チェディ
(ワット・プラ・スリ・サンペット)

ンペット寺院のとなりにあり、タイで最大と言われる漆黒の青銅製仏像が安置されている。これは、アユタヤ朝九代目のボロモ・トライロクナート王（在位一四四八—八八）の建立したものとも、二代エカトオツアロート王（在位一六〇五—一〇）が最愛の兄ナレスエン大王を記念して建てたとも言われる。また大仏修復の際、内部から何百体もの仏像が出てきた話は、今も語りべきとなつてゐる。建物のほうは、ビルマの侵入や天災によつて幾度も破壊され、現在の姿は一部ビルマからの資金寄贈を受けて一九五六年に再建されたものである。遺跡群の中には、一際彩り豊かで清新しく、活気に溢れている。

さて、ここでウイハーンという語が出てきたので、少しくタイの寺院建築に於ける建物の呼称についてみてみることにする。まず伽藍全体をワットと呼ぶ。そして、このワットを構成する建造物のうち、インドのストゥーパに起源をもつとされる仏塔をチエディ乃至プラ・チェディと呼んでいる。仏舎利をはじめ、王や高僧の遺骨が納められている場合が多く内院はない。また、古くはジャイナ教建築のシカーラなどに源を発するとされるクメール様式の塔はプラ・プラーンと呼ばれ、その尖端は特有のトウモロコシ状をしており、内院の設けられていることもある。これらの名称は、説明抜きで、既に用いてきたところである。そのほかに、プラ・モンドブと呼ばれる純粹タイ様式の塔がある。これらは全て仏塔と称することがで

15：00 ウィハーン・プラ・モンコン・ボピット見学。スリ・サンペット寺院のとなりにあり、タイで最大と言われる漆黒の青銅製仏像が安置されている。これは、アユタヤ朝九代目のボロモ・トライロクナート王（在位一四四八—八八）の建立したものとも、二代エカトオツアロート王（在位一六〇五—一〇）が最愛の兄ナレスエン大王を記念して建てたとも言われる。また大仏修復の際、内部から何百体もの仏像が出てきた話は、今も語りべきとなつてゐる。建物のほうは、ビルマの侵入や天災によつて幾度も破壊され、現在の姿は一部ビルマからの資金寄贈を受けて一九五六年に再建されたものである。遺跡群の中には、一際彩り豊かで清新しく、活気に溢れている。

きる。さらに、本堂に当たるものはボットと呼ばれ、得度式などの行なわれる聖域となっている。そして、これと対峙されるべきものがウイハーンであり、一般信者の礼拝祈禱所となっているのである。この呼び名は、梵語のヴィハーラの転訛らしいが、意味は随分異なってきている。以下詳

述をさけれ

ば、タイ寺院

における建物の呼称は、大体かくの如くである。

15..30 バ

スで移動し、

日本人町跡に着く。小さな村社ほどの空

間に、木製の祖末な鳥居と石灯籠が立ち、その奥の木陰に日本人

の手によるらしい木塔婆が何本も立てられていた。ここを守つているという老婆に促されるまま、一行はそこへ線香を上げ供養を成した。左手河辺には『アユタヤ日本人町の跡』と書かれた石碑と山田長政ゆかりのこの地の歴史が刻された碑文が建てられていた。対岸は旧ポルトガル人町であつたという。

15..50 日本人町跡をたちバンコク市内へ。

17..40 夕方のラッシュのなかをようやく宿舎のプレジデントホテルへ着く。小休止。

19..30 シアターレストラン「マニヤロータス」で夕食をとる。テーブルに並べられた数々のタイ料理と、舞台で演じられる民族舞踊に、暫疲れを忘れる。

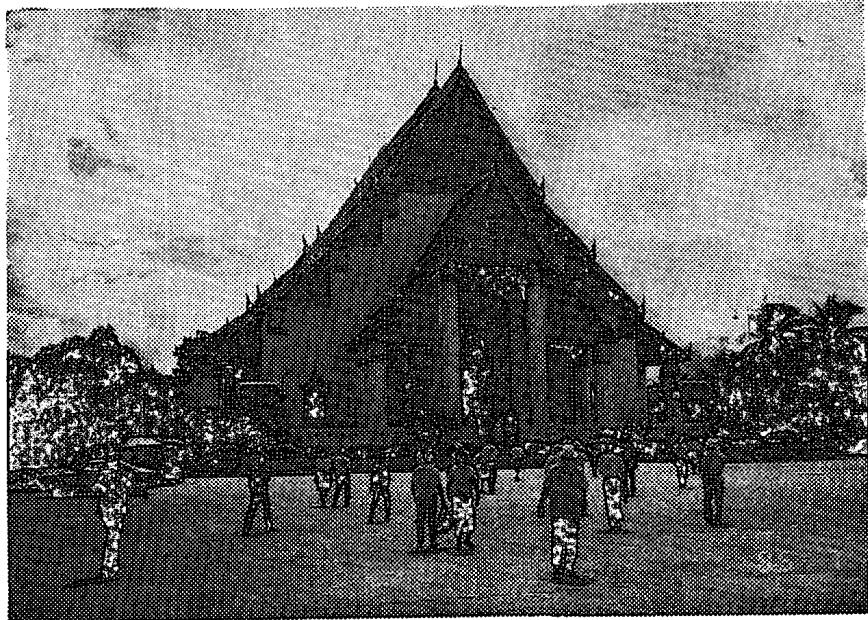
20..30 ホテルに戻り就寝。

七月二十七日（土）バンコク

06..00 起床。
06..30 朝食。

07..10 ホテルを出発し水上マーケットへ向う。

08..15 宿舎からさほどはなれていない船着き場から、中古車のエンジンを再利用しているというランチでチャオプラヤ河に乗り出す。巨大な水草の群生する水面を正にかき分けて進むのである。暫く河を下り狭い水路に入る。川岸に競り出した家々では、洗濯をするもの、髪を洗うものなど既に人々の一日が始まっている。小船を



ウィハーン・プラ・モンコン・ボピット



水上マーケットの朝

巧みに操って
ランチに近づ
き、果物など
の商いをする
ものもある。

08..30 土

産品店で一時
下船しショッ
ピングを楽し
む。

08..45 船

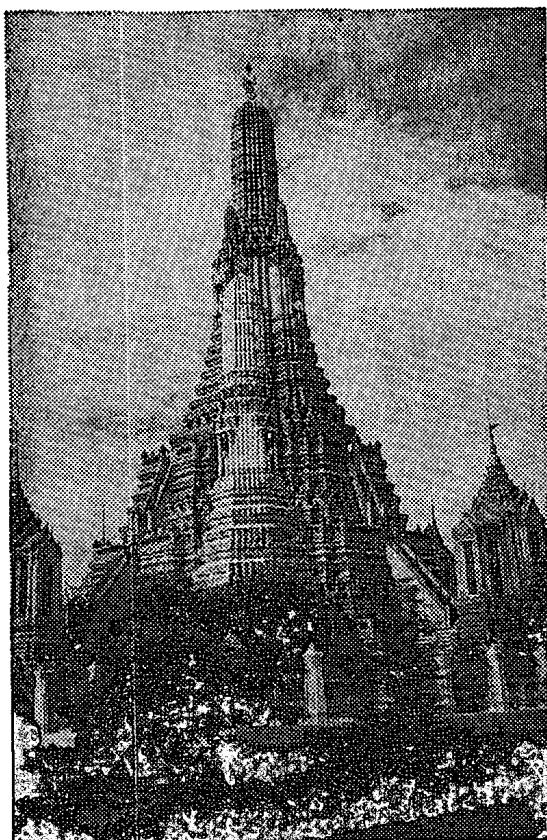
に戻つて程な
く、エンジン
の調子がおか
しい。よくあ
ることのよう
で運転助手の
若者が濁流に
飛び込む。二度、三度と潜り、長いときは一分近くも上がつてこな
い。水面には小さな泡粒ばかりがのぼってきて気をもませる。一同
の見守るなか、若者は五、六度目に見事な成功をおさめた。手には
ビニール性の袋の切れ端が擱まっていた。思わず辺りから拍手が沸

いた。最近は河の汚染が進み、こうしたものがスクリューを止めて
しまうちらしい。エンジン始動。未だ低い朝日のなかを行くうち、家
々の空き地に小さな祠のが目に付く。これはタイの何処でも
よく見掛けるもので、大小の差こそあれホテルの前庭にさえ祭られ
ていていろいろ供物がされている。通訳の方に訪ねると、それは土
地神であるとか、家神であるとか言われる。スピリット・ハウス或
はサーン・プラームと呼ばれるものであろうか。家靈・村靈な
どの守護靈をまつる祠ともきくがよく解らない。タイ特有のピイー
(精靈)の社として写真に撮られていたようにも思う。

ところで、ピイーの信仰に関してはタイ人の間乃至タイの人々と
我々の間に大きな認識上の差があるようである。タイサンガでの生
活経験がある青木保氏もその著書『タイの僧院にて』で、タイの人
々のピイーに対する態度は正に二律背反的だといつてはいる。合理主
義・近代科学主義の確立こそが国家的目標とされる現状にあって、
タイの人々は信仰においても合理的精神に貫かれた仏教を正統的に
有しており、呪術的なものなど信じないと一方で主張する。確かに
この傾向は西欧的教育を受けたエリート達に顕著であるようだ。
タイ国元首相のククリット・プラモート氏がある講演のなかで、仏
教教理の科学的整合性について力説していたのを思い出す。こうし
た立場からすればピイー信仰は、いわば「恥部」として隠されるべきものである。しかし他方、青木氏は、彼らの心奥にはピイーの存
在についての確たる信仰があるという。それはよそ者に容易に覗か

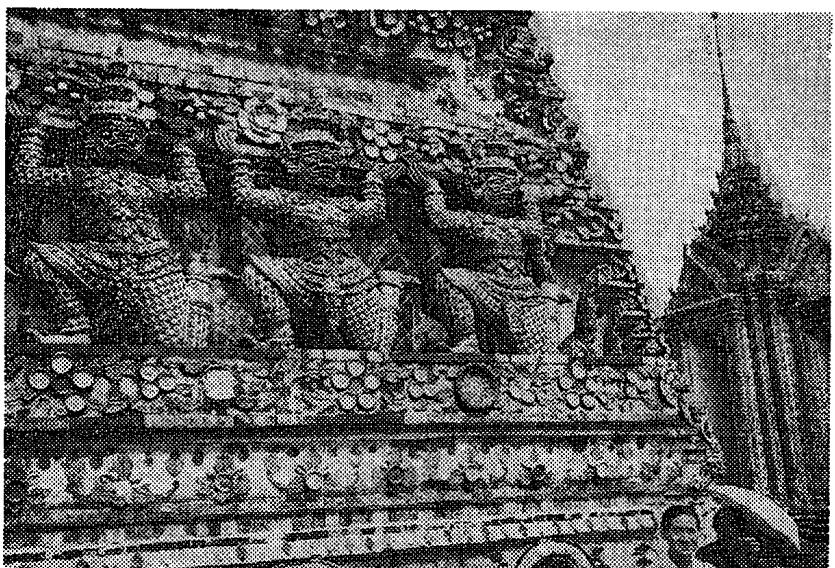
れたくない文化の深層であるという。そして、いささか図式的だと自省しながら、タイの人々においては生存の一切が、ブッダの光輝とピィーの暗黒との対応によつて決められると述べている。また更に、近代科学主義の只中でその行きづまりさえが論じられる、日本のような社会に生きる我々には、タイに見られるような非合理性を内含した社会・文化のあり方に心惹かれ、そこから何かを求めたいという欲求があるという。タイの人々の持つこのような微妙な心の揺れと、我々のかかる欲求との不調和が、何か訛然としない通訳の説明にも反映していたのかもしれない。

09 .. 20 ランチはチャオプラヤ河を遡つて暁の寺院に到着する。



ワット・アルン（暁の寺院）

古都トンブリにそそり立つこの壮大な建造物は、東南アジア中最も美しい傑作に属し、あらゆる旅行記中に賛嘆の言葉をもつて綴られているものである。ワット・アルン（暁の寺院）の創建はトンブリ王朝期であるといわれるが、次のバンコク朝ラマ二世と三世が中央の大塔と四基の小塔を完成し、その後チュラロンコーン王の治世にも再修復を施しているゆえ、都合二つの王朝にわたつて現在の姿となつたのである。露台を支えているのは、英雄譚ラーマキエンのなかで、降臨したヴィシヌ神の化身であるプラ・ラーム（アユタヤの王子）に討伐された巨人や悪霊の像である。ラーマキエンは印度神話ラーマーヤナのタイ化されたものであり、バラモン教に起源をもち、ヴィシヌ神の化身プラ・ラームの業績をたたえた讃歌として現代もタイ国民にはいたつて馴染み深い。大塔の急な階段を登ると上段の回廊に出る。そこからは新旧両都の素晴らしい展望が与えられる。回廊上方には内院入口を示す壁龕があり、三つの頭を具えた白象エイラワンにのつたインドラ神の姿が印象的である。さらに四つの小塔の壁龕には、白馬にまたがつた月神の姿が同じ様にのぞいている。また、大塔の前景に配された二基の緑色花崗岩の支那風武人像は中国華僑文化の影響を物語つている。大塔の高さは七五メートル、中国から取り寄せたという極彩色の陶片やガラス片が白地の漆喰にうめられ、全体を覆つていて。この表面装飾の中には古代タイのあらゆる陶磁類も埋め込まれているという。これら的情景が渾然一体となつて異様な美を創り出しているワット・アルンは、



台脚を支えるヤクシャ (ワット・アルン)

裔であり、トンブリを新都とさだめて以来華僑を御用商人として優遇したため、ここにタイ経済における華僑の確固たる地位が築かれることとなり、今日に至っているといえよう。王は国内の平定に努めたが、晩年精神錯乱に陥り、腹心のチャクリ将軍によつて王位を

まさにタイの歴史と文化の象徴といえよう。

ここで暫くタイの歴史に触れてみよう。アユタヤ滅亡後、このアユタヤ朝廷の武将ピア・タクシン（鄭昭）がビルマ軍に反攻を加え、激戦のすえタイの領土を回復して、自ら王となつて開いたのがトンブリ王朝（一七六七一八二）である。王は潮州華僑を父にもつ華

解かれ、この王朝は一代で滅び去つた。タクシン王のあとを継いだチャオプラヤ・チャクリは一七八二年に即位し、ラマ一世（ラマ六世治下に発布された法令により歴代王はラマと呼ばれる。）となつた。清に入貢し、昭の子と称したとも言う。ラマ一世はトンブリの対岸をクルンテープと命名して都に定めた。以降今日に至るまで、この王朝はその都の名を頂いてクルンテープ朝あるいはチャクリ朝、バンコク朝、さらにはタイ国史上の暦年の表現としてラタナコーシン朝などと呼ばれている。

ワット・アルンの創建時期は以上の二王朝に亘つてゐるのである。

09.55 東岸のエメラルド寺院を見学。この寺院は正式にはワット・プラケオという。チャクリ朝初代のラマ一世により建立されて以来、殆ど全ての歴代王が造営に力を添えてきており、タイで最も華麗な建築群が見られる。古い王宮内苑の周壁のなかに、寺院の堂宇と王宮の棟々が立ち並んでいる。ここは僧侶住居地域の付属していないタイ唯一の寺院である。それ故、僧院としてでなく、歴代王の宮中礼拝堂としての役目を担つてきており、タイ王族の特殊祭祀は、すべてこのうちで執り行われたのである。またこの寺院がタイ国内で最も格式高いものとして尊崇される理由の一つは、スマラクド仏陀の像が安置されていることによる。俗にエメラルド仏といわれるこの仏像は、紀元前四三年に北インドのパトナで造られたといふ。三〇〇年後、この地に起つた内戦を避けてセイロンに移された。紀元四五七年にパガン王がセイロンへ使節を送り、この仏像と

聖典を譲り受けたが、帰路嵐にあって像を失う。ところがそれはカ
ンボジアの海岸に打ち上げられ、その後アユタヤ・チエンライ・チ

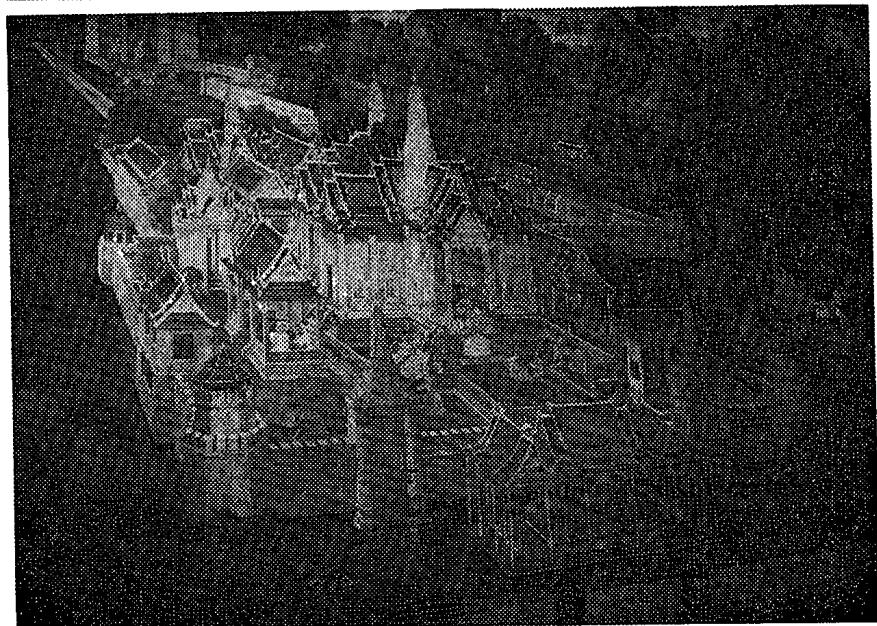
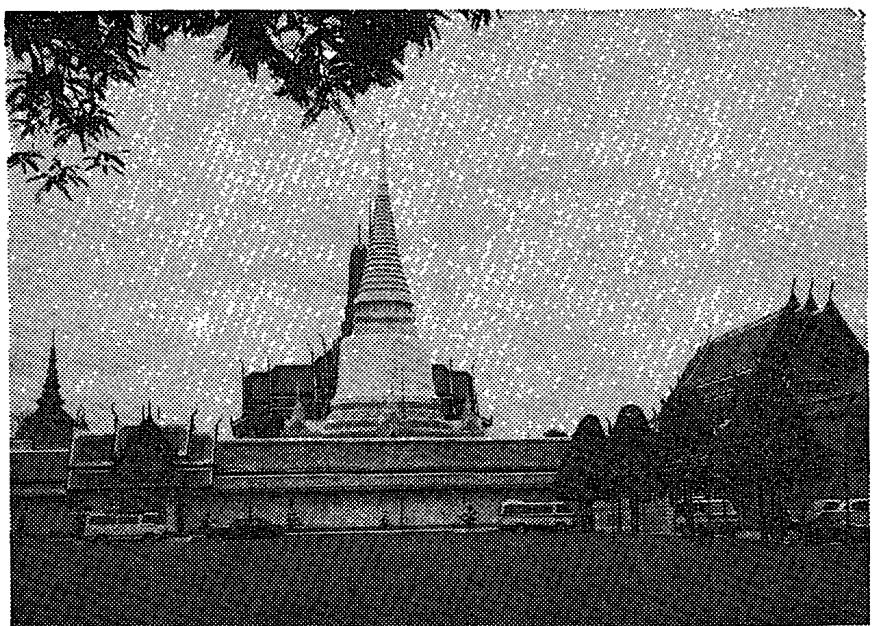
ヤンマイ等幾多の地を転々とした。ランナータイ王国の王女とラオ
ス王の王子との成婚を機に、一旦ラオスに入り、一五六四年には首

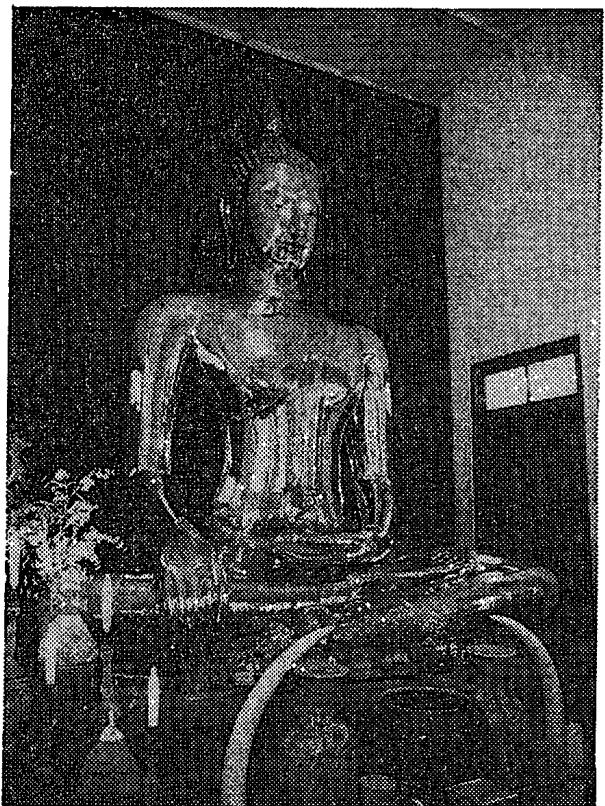
ワット・プラケオ

(王宮寺院・エメラルド寺院)

守門神（ワット・プラケオ）

本堂内壁画（ワット・プラケオ）





黃金仏
(ワット・トライミット 黄金仏寺院)

都ビエンチャンに安置されている。トンブリ王朝期のラオスへの侵攻にともない再び持ち帰られた仏像は、先述のワット・アルン、ワット・パーを経て一七八五年にこの王宮寺院におさめられることがなつたのである。これを手にするものは世界を制するといわれた碧玉製の小さな坐像は、今はるかな歴史の道程を過ぎてここにある。

ワット・プラケオの建築様式は、それぞれが実に特徴的である。北側のプラメーン広場から眺めると、黄金のベル型プラ・チエディが最初にあり、その後方に二つの王室専用大謁見室がある。それぞ

れ手彩によるマホルカ焼タイルに飾られ、蓮華を象った台脚はほつそりとしており、雨庇には無数の銀製の鎗が下げられ、微風のひとそよぎごとに愛らしい音を響かせている。それらは、チエディに比べて一層繊細な印象を与える。その一つはモンドップと呼ばれる建築様式を示しており、鋭い尖塔が空を貫いている。いまひとつは上方から見ると十字形に設計され、棟の中央にはプラ・プラーンが巨大な菌類のように生え出ていて面白い。境内には、有名なラーマキエンの壁画、そして半人半鳥のキンナラや守門神ヤクシャなどの像、果てはアンコール・ワットの模型までがあって、その様はさながら大きな宝物庫の感がある。

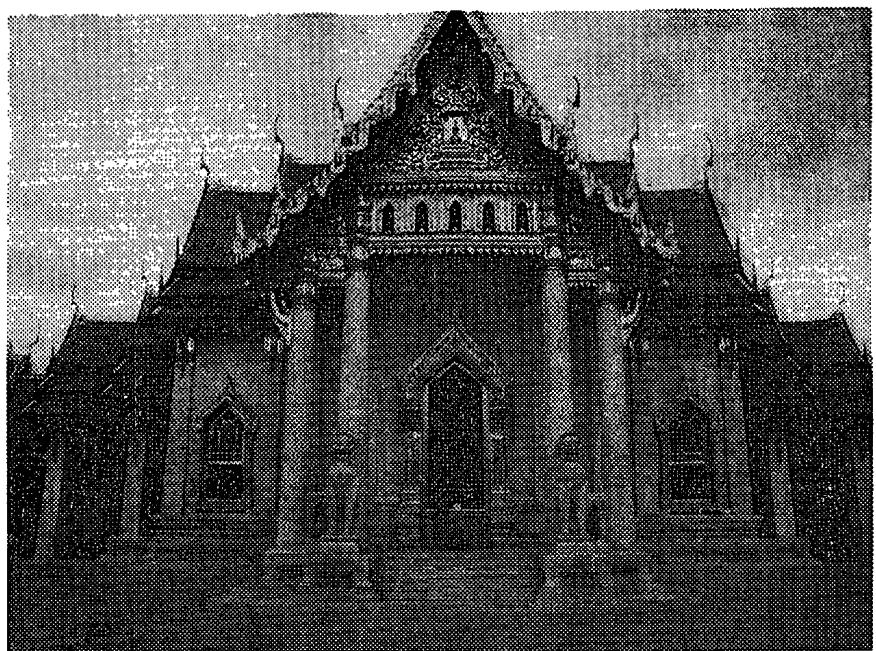
11・45 エメラルド寺院を出た一行は、中華街で昼食をとりながら休憩した。

12・45 黄金仏寺到着。この寺院は正しくはワット・トライミットといい、高さ約三メートル、重さ約五・五トンの黄金製の大坐仏がある。典型的なスコータイ様式で、頭部には火陥状のラッサミーを有し、足は半跏趺坐、手は降魔印を結んでいる。全身は丸みを帯びていて女性的でさえある。拝すると、漆黒の玉の嵌込まれた瞳が訪れるものを見守っている。スコータイ期に铸造されたものとされるが、この地に移されるまえはバンコク下町の廃寺にあり、表面には漆喰が塗っていたという。この姿が発見されたのは一九五三年のことである。

半時間ほどの見学を終え、移動途中で宝石店によりショッピング

を楽しむ。

14・30 大理石寺院到着。これは「王様と私」のモデルともいわれるラマ五世チュラロンコーン王（在位一八六八—一九一〇）の命により建てられたものである。タイ寺院特有のchediやプラン是没有。屋



ワット・ベンチャマポービット（大理石寺院）

根や飾り窓を除くすべてがイタリア製の大理石でできているのでその名があるが、正式名はワット・ベンチャマポービットである。ボットの正面入り口は西洋風の円柱に支えられ、その下

にはヤクシャに代わって一対の獅子像が置かれている。飾り窓のステンドグラスなど、建造の新しいせいもあってそこここにユニーケークが見られる。裏手にある内庭には回廊が巡らされアジア各地から集められた五三体の仏像が並んでいる。名高いガンダーラの苦行仏やスコータイの遊行仏などのレプリカ群をすぎて再び外に出ると、辺りは黒山の人だかりであった。折しも人々は長蛇となつて動き出しその先頭付近には一人の白衣の男がいた。どうやら彼がこの寺院に入門するものと見える。人々はボットを一周し正面入り口に戻ると、男を取り巻くようにして最後の別れを惜しんでいるようだ。彼がその肉親らしき人達に両手を差し伸べると、黄色いお揃りが一斉に撒散らされた。僧の嫁入りという妙な言葉が脳裏に浮かんだ。後で思えば貴重な体験をしたことになる。

15・15 フリーショップで四〇分ほどを過ごす。

16・20 スネークセンター観光。お馴染みのコブラとマンガースのショーなどみてバスに乗った。

17・00 ホテル帰着。

19・00 日本料理店「新博多」にて夕食。懐かしい日本の味を噛み締めながら打ち上げ会が始められた。一同タイ旅行の無事終了を喜びあい、また明日の帰国を思つて杯を重ねた。

20・30 店を出て宿舎へ向う。バスの窓にバンコクの夜景が美しく映っていた。

タイ国仏教研修の旅（岡島）

七月二十八日（日）バンコク——大阪

05 .. 30 起床。
06 .. 00 朝食。
06 .. 30 ホテルを出発し空港へ。
08 .. 40 団員の大半は日航七〇二便で一路大阪に向った。筆者を含む残り六名は、一時間後、成田経由の別便（日航四八二便）でバンコクに別れを告げた。
20 .. 00 大阪空港到着。解散。

おわりに

タイ王国は、憲法に宗教の自由を唄つてゐるが、その実態は五〇〇〇万人といわれる総人口の九〇%以上が仏教徒という世界有数の仏教国、正に「黄衣の王国」である。また政体の面からいと、一九三二年六月の人民党による立憲革命により絶対王政が崩壊して以來立憲君主政体をとつてゐるが、憲法には国王自らが仏教徒であり、しかもダルマの保護者であるべきことが唄つてあることもあって、依然として国民の王に対する信頼と尊崇は厚い。

王を頂点に国民の殆どが信奉するのは、紀元前三世紀中頃、マヒンダ長老によってスリランカに伝えられ、一四世紀のスコータイ王朝期にこの地に請來され定着したテーラヴァーダ仏教（上座部仏教）である。今回の短期間の研修旅行においては、この仏教を内容にまで立ち入つて理解することはできなかつた。しかし、訪問した

各地の仏教建築は一見するだけで我々に強烈な印象を与えた。それは第一に視覚的に与えられる一種の文化的ショックであり、次には、同じ仏教といいながらくも異なつて映じるタイ仏教への驚きであつたようと思われる。更に、これらの地で垣間見ることのできたこの國の人々の信仰あつい姿は、複雑に多様化した日本の宗教的現状を考えるとき、我々に深い感銘を与えると同時に仄かな憧憬の気持を起させるものであった。

最後に、藤田トラベルサービスのスタッフ諸氏はじめ、本旅行にあたり何かと御助力頂いた方々に深く謝意を表する次第である。